

### 三 昭和前期

#### 概 説

昭和元年（一九二六）から第二次世界大戦が終結した昭和二十年（一九四五）八月十五日までのいわゆる「戦前」と使われる時代を昭和前期とした。

昭和の当初は大正時代に続いて不況時代で、政府は徹底した緊縮政策をとった。官吏・軍人等の人員整理と給料の引き下げを断行したのもこのころで、一般企業も政府にならって賃下げ、首きり等労務者の犠牲によって切り抜けようとした。米価は一石三十三円から十四円と大幅に下落し、失業者は続出した。

夜逃げ、行き倒れ、一家心中、娘の身売り等もあり、労働争議、小作争議もしばしば起こり、社会不安はいよいよ増大した。「大学は出たけれど」という映画ができたのもこの時代で、大学を出ても就職難に苦しんだのである。このような恐慌の中から頭をもたげたのが軍部や右翼勢力である。その結果は満洲事変の勃発となり、国際連盟の脱退、日華事変、太平洋戦争へと発展したのである。

#### 1 満洲事変

昭和の始めごろは軍閥や右翼等の横暴による暗殺やクーデターが発生し、昭和六年（一九三一）の九

月十八日満洲事変が勃発した。奉天郊外柳条溝の一発は満洲事変の発端となり、太平洋戦争へと拡大した十五年間の戦争の開幕を告げる不吉なドラの響きであったと言える。大正デモクラシーのムードは相次ぐ軍人の暴力沙汰で吹っ飛んでしまい、日本は大陸侵略へと突進しついに満洲を占領した。

「日本の生命線満蒙」というスローガンが昭和六年の春ごろからにわかには軍部や右翼によって叫ばれ、翌七年三月溥儀を皇帝とする満洲国が成立した。「王道楽土」「五族協和」の旗印のもとに日本人が満洲国官吏に任命されて実権を握ったいわゆる傀儡政権であった。

当町からも当時軍籍にあった人でこの満洲事変に出征した者も相当あった。しかしこの満洲事変まではまだ世情は落着いていた。

#### 2 日華事変（支那事変）

昭和十二年（一九三七）七月七日夜、北京郊外の芦溝橋で日中両軍の衝突が起きた。当時の近衛内閣は盛んに不拡大方針を声明したが、始めに北支事変といていたのも次第に拡大して日華事変となり、日中は全面的な戦争に突入したのである。

昭和十三年、国家総動員法を作って一切の経済活動をこの法律で自由に統制したり、動員したりすることができるようになったが、今度は経済の各部門に統制令を作り、生産と消費のすべてを戦争遂行一本にしぼっていった。

日中戦争が抜き差しならぬ泥沼に入った昭和十五年（一九四〇）、政党を解散して「大政翼賛会」を作っ

た。戦争協力のための上意下達の機関で、その最下部の機構が「隣組」である。これを通じて生活物資の配給、金属等の供出、防空演習、公債の割当、労力奉仕等に動員された。国会議員は翼賛政治会へ組織され、国会は政府や軍部の議案をうのみにする翼賛議会となつて、立法院の実質を失ない、労働者は産業報国会、農民は農業報国連盟、青年は大日本連合青年団、婦人は大日本婦人会に強制的に加入させられた。事変が進むに連れて戦時色はますます濃くなり、国防献金、皇軍慰問の拠金、青年団の古新聞回収、飛行機の献納等が行われ、昭和十三年ごろは頭髮にも戦時色があふれるようになった。流行歌等も甘ずっぱい歌は聞かれず軍歌調へと移行し、青年団や高等学校でも男子は丸刈りが奨励され、女学生も断髪禁止令が出され「おかつぱ」は厳しく排撃された。

事変が激化するにつれ戦線も拡大し、戦傷病者の内地送還も日増しにふえてきた。このため高木瀨に陸軍病院の佐賀分院も開設され「白衣の勇士」が次々に送り込まれた。昭和十四年五月二日には白衣の勇士に贈る「佐賀市愛国号自動車」が献納され、同年十一月十四日には「出征兵士を送る歌」の発表会が佐賀陸軍病院ステージや佐賀市公会堂で催され、当時の一流歌手を招へいした。

『わが大君おおきみに召よされたる 命いのち榮はえる朝あさぼらけ たたえて送る一億の 歓呼は高く天をつく いざ行けつわもの 日本男児』 この歌はたちまち全国に徹底し、村人や学校の児童生徒達は日の丸の旗を打ち振りこの歌を高らかに歌つて村外れや佐賀駅頭に出征兵士を送った。

### 3 太平洋戦争（第二次世界大戦）

日本の南進策に対し、アメリカはその進出を阻止しようとして、イギリス、中国、オランダと共に、いわゆるABC'Dラインを結成して、マニラで四国間の軍事会談を開き、又日本に対して資金凍結を行ない経済封鎖を強化した。日本でも陸軍以外は必ずしもアメリカと正面衝突することを喜ばず、何とか外交交渉によって解決を望んだが妥協点は見られず、解決不能の泥沼に入り込んで行き、ついに昭和十六年十二月八日太平洋戦争に突入した。欧州では独・伊と英仏諸国との欧州大戦が始まり、日本は日独伊三国同盟に調印し、十二月八日日本海軍のハワイ真珠湾奇襲攻撃によって太平洋戦争の火ぶたを切った。一々の戦局については省略するが、後半の戦局においては本土がB二九の空襲にさらされ、昭和二十年八月六日アメリカは広島、同九日には長崎に原爆を投下して数十万の市民を殺傷、ついに八月十五日正午、天皇自ら降伏の勅語を放送、太平洋戦争はここに終わりを告げたのである。

#### (1) 戦時体制

昭和十二年青年学校には軍事教練の指導員を、旧制中学校や高等学校、大学にはそれぞれ現役の陸軍将校が配属されて軍事教練を正課とした。女学生はなぎなたを振り、家庭婦人は竹槍訓練が行われた。時には国防婦人会の会員としてたすきをかけて、日の丸の旗を手に出征兵士を送りに行った。

『勝つてくるぞと勇ましく 誓つて国を出たからは てがら立てずに死なりようか

進軍らっぱ聞きたびに まぶたに浮かぶ旗の波（露宮の歌）

当時日本のだれもが歌った軍歌である。街角では千人針を依頼している婦人がよく見られた。各地域

社会では隣組が組織され、月に一度は常会が開かれた。上意下達の回覧板もしばしば回された。

『とんとんとんからりと隣組　障子を明ければ顔なじみ　まわしてちょうだい回覧板

教えられたり教えたり』（隣組の歌）

空襲にそなえての防空演習も行われた。庭先には家庭用の防空壕を掘り空襲警報ごとに避難した。焼夷弾の火の粉をたいて消すために繩を束ねた火たたき棒を用意し、防火用水や砂袋が各家庭の前に積み上げられた。ばけつりレーによる消火訓練、燈火管制等が厳しく行われ、男子は職場でも巻脚絆、女子はもんべに防空頭巾を肩にかけて執務した。学校の児童生徒も防空頭巾持参で登校した。

太平洋戦争に突入してからの日本は「進め一億火の玉だ」というスローガンで、国民一人一人がそのまま兵士と同様であったのである。

### ① 学徒動員

文部省は昭和十三年六月「集团的勤労作業運動実施に関する件」を通牒した。農事家事の作業、清掃、修理、防空施設や軍関係作業、土木作業等で、これは勤労教育ということで行われた。

昭和十四年から中等学校以上に対し、集団勤労作業を漸次恒久化し、正課に準じて取り扱かうことになった。その作業の対象は主に木炭増産、飼料、食糧の増産であった。昭和十六年から一年を通じ三十日以内の日数を正課と認め作業動員をし、同年八月には各学校で「学校報国隊」が結成された。戦局が次第に進むにつれて学徒の戦時動員体制が確立し、修行年限は短縮され、在学期間の三分の一相当期間

の動員が実施されることになった。男子には戦時訓練、特技訓練、防空訓練等がなされ、女子には戦時救護の訓練がなされた。大学は非常時編成に組織され多数の学徒が出陣した。

### ② 女子挺身隊

太平洋戦争が拡大するにつれて次第に労働力が不足してきたので、この解決策としてついに女子労働を動員することになった。十九年早々女子挺身隊を編成して軍需工場へ送り込んだが、県ではわが佐賀市郡と杵島郡とで第一次の女子挺身隊が結成された。戦局の拡大と共にこれは法律で強制化され、中等教育を受けた者が多数動員されたが、一般の徴用とは区別され職場の花ともてはやされた。しかし食糧増産のため農家からは採用されなかった。

### ③ 疎開始まる

昭和二十年三月、政府は相次ぐB二九の爆撃で人命を失なわれるのを避けるため、非労働要員の強制疎開を始めた。大都市では疎開地が指定され、子供や老人は縁故をたよって田園地帯や山間地帯等に疎開したのである。当時では他都市からの集団疎開はなかったが、縁故による疎開者は相当数に上っていたようである。佐賀市では重要家具の疎開や焼夷弾による延焼防止等のため密集した家屋の一部除去等が実施された。八月五日深夜から六日未明にかけての佐賀市周辺の空襲の時は多布施川の堤防等は避難者で一ぱいであった。

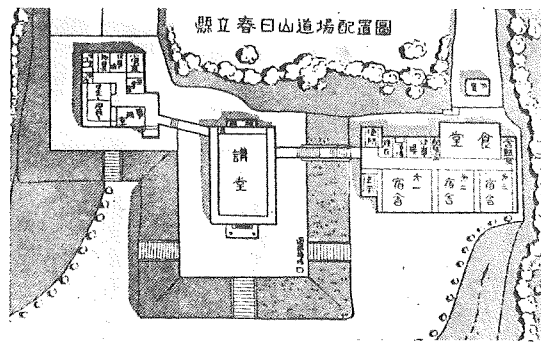
### ④ 春日山道場

都渡城のバス停から東へだらだら坂を百四五十メートル上ると現在「青年の家」が建てられている。ここは以前県立春日山道場が建てられていたところである。

昭和十一年（一九三六）五月、当時の古川佐賀県知事の議案が出てから約二カ年後の昭和十三年一月三十一日落成開場している。当時の日本は王道楽土を夢見た満州国の建設を国策としていた時代であり、日華事変が勃発したその翌年であれば戦時体制下に即応した施設であったといえる。

国民精神の作興を図るのが建設の趣旨で、これを根底とした道場精神に基いて心身を鍛錬し、生活訓練を行って確固たる国家観念を植え付け、しかも実践躬行の人を養成するのが目的とされていた。各層各階の人々が次々と宿泊の訓練を受けた。一日の行事の一例をあげると次のとおりである。

行事の合図はすべて大太鼓でなされた。朝のしじまを破って打ち鳴らされる大太鼓の合図で一斉に起床、寝具を納め、裸一貫うしろ鉢巻をして速やかに庭前に整列、東方遙拝、国旗掲揚、木剣体操（時により異なる）の後、かけ足で川上川に向かい、「みそぎ」の行事、夏とはいえ早朝の水は肌をさすように冷たい。その後清掃、朝食となる。



食前にはいつも食前の感謝の言葉を斉唱する。「一つ、この食物が食膳に運ばれるためには多くの人人の恩恵によることを感謝します。二つ……三つ……」と唱えて食事に移る。この感謝の表現と食事訓練のもとに出された料理は一物一汁も残してはならず、食べ終わると食器にお茶を注いで飲む。鯛の骨といえども残せば日本精神の作興にもとるとして厳しくしつけられた。

建物の中央は講堂である。六十三畳敷で百名くらいの受講者を収容できる大広間であった。中央正面の一段高い壇上に神殿が設けられ、受講者一同低頭しているうちに道場主事がうやうやしく開扉する。やがて祝詞があげられ、終われば一斉に二礼二拍手一礼をして閉扉する。

主な日程は講話を聞くことで、精神作興に基づいたものが多く、受講団体の職種によって講師も選ばれていたようである。夜は座禅を組んだり、詩吟の練習があったり、又祝詞を習得させられた。宿泊場所を実相院に移すこともあり、この時は「般若心経」の指導や写経等が加えられた。

宿泊する建物は「一心寮」と名付けられ、三十六畳一室、二十八畳二室、六畳の舎監室、二十坪の板の間の食堂その他となっていた。道場の建設費は一、大倉精神文化研究所長大倉邦彦氏寄付金六千五百円、一、佐賀県費二万二千円、一、鍋島侯爵家用地二反五畝、春日村原田隆一氏所有地五畝無償借用、一、佐賀郡市青年団二十三団、神埼・小城・三養基郡青年団五団、学校四校、合計三十二団体の地ならし工事の勤勞奉仕ででき上がったものである。

## (2) 戦時下の国民生活

### ① 物資不足

当時国民が戦争をひしひしと感じたのは生活物資の欠乏であった。昭和十三年六月、政府は「綿製品非常管理令」を発表し、純綿製品はもち論綿が多少でも混った繊維製品は一切販売を禁止された。ガソリン、羊毛、ゴム、鉄、鉛、アルミ材料も厳しく統制された。物資はすべて政府の管理下に入り、絶対量が少なくその少ない物資を分配するために配給制度が敷かれたのである。

昭和十六年六月から砂糖、マッチの切符制となり、佐賀では砂糖は一人一か月半斤(約三百グラム)、マッチは一日の使用数五本の割合いで配給切符が発行された。木炭はガソリン不足から木炭自動車に供給されるので家庭用は制限された。昭和十五年八月に公布された臨時米穀配給統制規則により同年九月から実施され、十五年末までに食糧の切符割当て配給が県下の市町村に行われた。

配給量は労働者一人一日二合五勺(二七五グラム) 麦八勺(八八グラム) うどん一か月二百五十匁(一キロ)、一般には米一合(三百グラム) 麦六勺(六六グラム) うどん一か月二百匁(八百グラム) であったが、十七年になると成人は一律に一日二合四勺(三六〇グラム)の配給量になった。しかしまるまる米穀が配給されるのではなく麦、うどん(短めん)、パン等の混合配給で、しまいごろには大豆粕かすや小麦粉、甘藷の粉、馬鈴薯等が配給された。

みそや醤油、塩、肉、卵等の食料品もことごとく配給制になり、家庭用の塩は一人当たり一か月二百グラムであった。続いて魚や野菜等の生鮮食品も配給ルートにのった。配給といってもそれがややもす

れば途絶えがちであった。

食糧不足を補うために狭い庭先を耕して一坪菜園が作られたり、土手や学校の運動場等も耕されて南瓜やヒマを作った。農村の子供達も学校から帰ると松根油を採集したり、桑の皮はぎ等に懸命であり、又ロープ等を作るためマオランという新種植物の栽培も奨励された。桑の皮はぎでは昭和十六年、政府は資源開発のため「桑剥皮統制規則」を設け衣料繊維の原料としての桑皮の確保に乗り出した。佐賀県には三七五トンの生産割り当てがあり県下の養蚕組合はその方針に基づき、全面的に桑の皮の生産指導を展開し、青年学校、国民学校の生徒児童も積極的に参加している。

昭和十七年、川上国民学校では製紙原料として桑皮六千貫(二万二千五百キロ) 供出の割り当てを受け、全児童千二百人を動員して採取に当たった結果、見事、目標を達成しこの代金三千六百円は同校で続けている国防貯金に回された。都市の主婦達は大きなリュックを背に農村へ買出しに出掛けた。食糧等を農村から買入れ都市へ持って行って売る闇屋やみやなどの出現もこのころからである。衣料も次第に欠乏した。不評判のスフでさえ配給制度によってわずかに流通するに過ぎない。衣料切符が都市では一人当たり年間百点、郡部では八十点与えられ、その点数の範囲内で衣料生活がまかなわれなければならなかったのである。背広上下で五十点、ワイシャツ十二点、パンツ四点、手ぬぐい三点というのが衣料点数の例であるが、百点では衣料の数量は限られている。衣料切符制が始まったのは昭和十七年だが十九年には点数が更にけずられ、三十才以上は四十点、三十才未満は五十点で、これではほとんど買えない。そ

のうえ衣料切符は持っていても現物が不足勝ちであった。時たま自由販売品でもあれば長い行列ができた。女子はもんぺ、男子は国防色の国民服という姿がこのころの服装であった。「欲しがりません、勝つまでは」という標語ができたのは昭和十八年のことである。

やがて金属類、綿等の供出が始まり、家庭用品はもちろん銅像や寺院の鐘や浮立の鉦等も弾丸や兵器を造るために供出させられ、貴金属にも及ぶようになった。物資の絶対量不足はいつの間にか国民生活をほだかにして行った。

### (3) 終戦への道

征空権を失なった本土は毎日のように空襲が続き、空襲警報のサイレンを聞くことは日課のようになってしまった。そしてそのたびにどこかで家が焼かれどこかで人が死んで行った。終わりがこになる

と〇月〇日にどこを空襲するというビラをまきそのとおりに空襲を強行してきた。佐賀市周辺でも二十年八月五日深夜から六日の未明にかけてB二九の洗礼を受けた。マリアナ基地を発進したB二九約三十機は、九州西海岸を北上して佐賀平野上空に侵入、約一時間半にわたって空襲を受けた。佐賀県庁、高木瀬の一部も爆撃を受け、諸富のアルコール工場（現味の素九州工場）が一部被災した外、佐賀市大崎一帯、西与賀小学校など焼夷弾のため火災が起きた。当町は幸い空襲による被災はなかった。

同年八月六日の広島空襲は原子爆弾一発で広島市民四十万の内二十五万人が即死もしくは原爆症のため命を奪われたのである。ついで八月九日には長崎市にも原子爆弾が投下され、七万人を越す非戦闘員

の死傷者を出した。当時の西部軍管区司令部は原爆投下後「一、八月九日午前十一時ごろ、大型機一機は長崎市に侵入、新型爆弾らしきものを使用せり。一、詳細目下調査中なるも被害は比較的僅少な見込みなり」という発表をした。きのこ型の爆煙が当地からも見られたが、長崎からの避難者達から「ピカドン」の恐ろしさが次々に伝わっていった。この爆弾が駄目押しの一手となつてついに同年八月十五日正午、降伏と国民生活の安寧を論す天皇の放送があり、日本は連合軍に無条件降伏したのである。

## 4 交通

### (1) 佐賀線の開通

長崎本線佐賀駅と鹿児島本線瀬高駅を結ぶ国鉄佐賀線は昭和十年全線が開通した。五月二十五日佐賀市銅像園で官民千三百名が出席して開通式が行われた。

同線の新設は大正十一年帝国四十六議會でできまり、昭和四年三月着工、六年には矢部川―柳川間、八年には柳川―大川間が順次開通、その後中央部を上下可動のリフト式昇開橋として東洋最初、その工事方法は日本最初といわれる筑後川鉄橋が完成して、全線が開通したのは同十年五月二十五日である。

### (2) 貫通道路の完成（後の国道三四号線の一部）

佐賀市の中央を東西に突っ走る貫通道路（佐賀市巨勢町構口―嘉瀬町高橋）が完成したのは、昭和六年着工以来六年目の同十二年十二月のことである。当時としてはとてつもない広い道路で車道十二メートル、両側に歩道各三メートルで同十二年に名物の一本一円の「いちょう」が植えられた。

# 現 代



町民体育大会

「はよ寝やい はよ寝やい ワンワンが来よるバイ、神崎国道ガータガタ 貫道路路ツーツラツ、  
はよ寝やい 寝やいの」という子守歌までできた。昭和七年国の直轄事業となり同年西与賀―西田代間、  
八年道祖元―扇町間、十一年扇町―嘉瀬町間、十二年県庁前と工事完了。当時は広過ぎるといわれた貫  
道路路も、今日では交通許容量をはるかに越える混雑ぶり、これが緩和策として南部バイパスは完成  
し、ついで北部バイパスも開通している。